

マタイの福音書最初のビデオではマタイがイエスをダビデの家系に繋がるメシア、またモーセのような権威のある教師、そして共におられる神インマヌエルとして描いていることを見ました。イエスは神の国を宣言し人々の生活の中に神の国をもたらしました。多くの方はイエスを受け入れられたものの、当時の宗教指導者のパリサイ人たちは拒絶しました。イエスと宗教指導者たちとの対立はどのように展開していくのでしょうか。

次のセクションである14章から20章では、人々がメシヤにどんな期待を持っていたか綴られています。イエスはさらに多くの病人を癒します。そして二度もアラノニール群衆に奇跡的な方法で食べ物を与えます。一方はユダヤ人の群衆でもう一方はイホウ人の群衆でした。これは、モーセがアラノで行った奇跡と似ていたため、人々はイエスがメシアであると思い、期待が膨らみました。

しかし、宗教指導者たちは違いました。彼らは、詩編2編やダニエル書2章を引用し、メシアとは異教の支配者を打ち破る勝利者だと考えていました。彼らには、イエスは神を冒瀆している偽教師に思えたため、イエスを殺す計画を立て始めたのです。そこで、イエスは弟子たちにメシアとはどのような救い主なのかを教えました。なぜならそれは人々が期待していた救い主とは違ったからです。16章でイエスは弟子たちに、あなたは私を誰だと言いますか?と問います。ペテロはあなたはメシアです。生ける神の子ですと模範回答をしました。しかしペテロは軍事力によって勝利を収める王をイメージしていたのです。イエスは私は確かにオートなるが、あなたが思っている方法ではないとペテロに教えます。イエスは預言者イザヤが記した通り、メシヤは人々の罪のために苦しんで死ぬと語りました。イエスは人に仕える王としてイスラエル、そしてすべての人々のために自らの命を捧げるのだと教えました。しかしペテロたちはこれを全く理解できません。そこでイエスは四つ目の長い教えに続けていくつかの教えを語られます。メシアの王国の逆転の性質を通して、私たちの価値観も逆転すると教えました。このしもべとなった王の王国では人に仕えるのが荣誉であり、復讐する代わりに赦し敵に親切にするのです。さらに自らの財産を貧しい人に与えることによって本当の富を得るのです。仕えるメシアについていきたい人は、同じように仕えなければなりません。

次のセクションでは、イエスの王国と宗教指導者たちの王国が衝突します。イエスは過越の祭りのためにロバに乗ってエルサレムに入り、群衆は沿道から彼を賛美します。イエスはすぐさま神殿の庭に行き、生贄の行事を中断させるほどの大騒動を起こします。これは言葉以上に説得力のある行動でした。神とイスラエルの会見の場である神殿に対して、イエスはイスラエルの王としての権威も行使されたのです。イエスから見て、神殿は宗教指導者たちの偽善によって怪我されていました。イエスは彼らの権威に異議を唱え、彼らは腹を立てました。イエスと公の場で討論し、罠にかけ恥ずかしめようとして失敗し、最終的にはイエスを殺すことにしたのです。その応答としてイエスは最後の長い教えを語ります。彼はパリサイ人の偽善を猛烈に批判し、またエルサレムが神の国を拒絶したことに涙を流されます。そして弟子たちと退きこれから起きることを教えます。イエスは指導者たちによって処刑されますが、これによって指導者たちは自らの身に破滅を招きます。イエスの平和の王国を受け入れず、代わりにローマに反乱する道を選んだ結果、エルサレムとその神殿は破壊されます。しかしイエスはそれで終わりではないと言います。死んだ後、復活によってご自身の正しさが立証され、いつの日か再臨し、すべての国々の上に神の国を築くのだと。

その時まで弟子たちは、イエスの王国の福音を伝え続けなければいけないのです。イエスは最後の長い教えを終え、物語はついにクライマックスを迎えます。その夜、イエスは弟子たちと共に過越の食事をされました。過越の祭りは、過越の子羊の死によってイスラエルが奴隷から解放されたことを語り継ぐものです。イエスは食卓のパンとぶどう酒を取り、これらを新しいしるしとされます。彼の来るべき死が悪の奴隷から人々を解放する生贄であると示しています。食事の後イエスは逮捕され、サンヘドリンというユダヤ人指導者の議会で裁かれました。彼らはイエスはメシアではないと断言し、神への冒瀆罪で訴え、ローマの総督ピラトのもとに連れて行きました。ピラトはイエスが無実だと判断しました。しかし彼は指導者たちのプレッシャーに負け、イエ

スを十字架刑に処したのです。イエスはローマ兵に連行され、十字架に付けられました。このセクションで、マタイは最初の数章と同じように、旧約聖書からの引用を多用しています。イエスの死は悲劇や失敗ではなく、むしろそれは旧約聖書の予言の驚くべき成就でした。イエスはイザヤ書の苦難のしもべとして来たのです。彼は自らのために拒絶されたにも関わらず彼らを裁くのではなく、民の罪を負い代わりに裁かれるのです。こうして十字架の場面は終わりイエスの体は墓に入れられます。しかし最後の章で思いがけない展開が待っています。日曜日の朝でした家はイエスの墓が空であることを発見します。そして人々は死から復活したイエスを目撃します。この福音書の最後に、甦ったイエスが大宣教命令と呼ばれる教えを語ります。イエスこそが全世界の王であると教え、弟子たちをすべての国々に派遣し、福音を述べ伝えるように命じます。福音は、イエスが主であり、洗礼を受け、彼の教えに従うことで、誰でもメシアの王国に入れるということです。そして第一章で示されたインマヌエル、共におられる神という名前の通り、イエスの弟子たちへの最後の言葉は、あなた方と共にいる、でした。イエスが再び来られる日まで共にいてくださる、という約束です。これが、マタイの福音書です。

【要約】

マタイは、イエスをダビデの家系に繋がるメシア、モーセのような教師、そして神であるインマヌエルとして描いています。イエスは神の国を宣言し、多くの人を受け入れましたが、宗教指導者のパリサイ人たちは拒絶しました。イエスと宗教指導者との対立が描かれ、イエスがメシアとしての理解を弟子たちに説明しました。イエスは自己犠牲の王としての使命を強調し、価値観の逆転を教えました。その後、イエスの王国と宗教指導者の対立がエスカレートし、最終的に彼を殺す計画が進行しました。イエスは最後の教えでパリサイ人の偽善を批判し、エルサレムの拒絶に涙を流しました。そしてイエスは死後復活し、弟子たちに大宣教命令を与えました。イエスの復活は旧約聖書の予言を成就し、彼が全世界の王であることを伝えました。最後に、イエスは再び来る日まで弟子たちと共にいるとの約束を残しました。